

④ 在宅医療の立場から

トータス往診クリニック 大橋 晃太

トータス往診クリニック、NPO血液在宅ねっとの大橋です。コロナ禍での在宅輸血の現状と問題点について、当院の診療の中で感じていることをお話させていただきます。また、その問題点について、NPO血液在宅ねっとの取り組みについてご紹介したいと思います。

【スライド1】

第20回東京都輸血療法研究会

新型コロナウイルスの輸血療法への影響
～在宅輸血の立場から～

 **TOTUS** 
トータス往診クリニック NPO血液在宅ねっと

トータス往診クリニック
NPO血液在宅ねっと
大橋 晃太

【スライド2】

COI 開示

筆頭発表者名: 大橋 晃太

■本発表演題に関連して
開示すべきCOI関係にある企業はありません。

■紹介する症例は臨床症例の一部を紹介したもので、全ての症例が同様な結果を示すわけではありません。

【スライド3】

当院、トータス往診クリニックは、24時間365日対応の在宅療養支援診療所です。血液疾患の患者さんを中心に、輸血依存の患者様に対して、在宅での赤血球・血小板輸血を必要に応じて行っています。

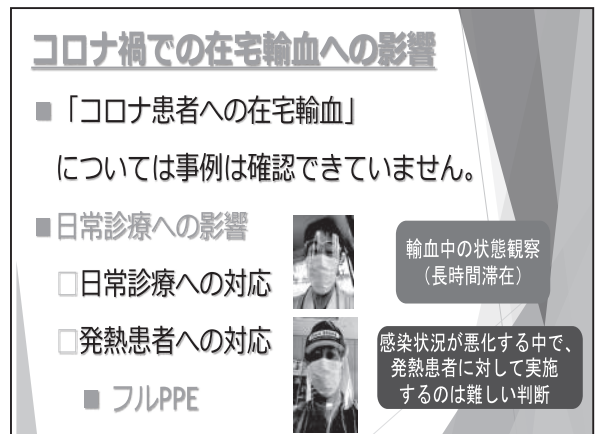


TOTUS
トータス往診クリニック

- 強化型在宅療養支援診療所（24時間365日対応）
- 常勤医3名、非常勤医5名、看護師6名、事務5名（血液内科医は常勤1名、非常勤2名）
- 医療依存度の高い方でも、自宅へ帰る選択肢を選べるようにしたい
- 特に血液疾患に重点
 - 輸血対応（赤血球・血小板）
 - 緩和的化学療法

【スライド4】

コロナ禍での在宅輸血への影響については、申し訳ありませんが、直接的にコロナ患者さんに対して在宅での輸血を実施した経験は当院ではありません。また、血液在宅ねっとの他の診療所のお話の中でも、コロナ患者さんへの輸血を実施したというお話は聞いていません。コロナ患者さんで在宅療養されている方が多くはない中で、さらに在宅輸血を実施している方も希ですの



コロナ禍での在宅輸血への影響

- 「コロナ患者への在宅輸血」
については事例は確認できていません。
- 日常診療への影響
 - 日常診療への対応
 - 発熱患者への対応
 - フルPPE

輸血中の状態観察（長時間滞在）

感染状況が悪化する中で、発熱患者に対して実施するのは難しい判断

で、この両者が重なったという事例は非常に少ないと思います。ただ、日常診療への影響はもちろんあります。通常の診療においても感染対策が必要となりますし、また発熱者の場合はさらに注意が必要で、フルPPEでの対応が必要となる場合があります。どうしても血液疾患の、白血病やMDS、悪性リンパ腫の患者さんたちは発熱がつきものですので、普段であれば腫瘍熱と判断しているものでも、感染状況が悪化している中では、やはり感染防御の必要性が出てきます。特に在宅輸血中は在宅赤血球輸血ガイドにも示されているように、開始後1時間は医療者が同伴することになり、長時間滞在する形になります。我々のクリニックは他の訪問看護ステーションさんと協力しながら在宅輸血を実施しているので、他事業所も絡んできますので、対応して頂けない場合も出てきます。そういう意味で、コロナ禍では在宅での輸血についても、いつも以上に必要最低限のものに制限するなど、制約の中で行わざるを得ない状況でした。

【スライド5】

ただ、このような直接的なコロナウイルス感染の影響よりも、多くの診療所で影響が大きかったのは、間接的な影響ではないかと思います。つまり、在宅輸血のニーズの増加の影響です。多くのマスコミでも取り上げられているように、病院の面会制限のため、終末期の患者さん、高齢の患者さんで特に、病院ではなく在宅での療養を希望される方が急激に増えました。その結果、

在宅輸血を要する患者さんも増加しました。また、クラスター等で外来機能の縮小・閉鎖を余儀なくされる医療機関もあり、その間で完全に在宅療養に移行するという訳ではなくても、一時的に輸血を在宅で対応して欲しいという依頼もみられました。さらに、患者さんご自身が、外出制限や、感染の恐れから外来通院ができなくなってしまい、在宅での輸血を希望されるというケースも多く生じました。

こういった形で在宅輸血のニーズが増える結果となりましたが、この間、入退院支援の業務が急激に増加して負荷がかかったと考えられます。基幹病院の入退院支援の方から「在宅で輸血できるクリニックはありませんか？」という御相談も急に増えてきており、在宅移行支援の必要性を強く感じました。

コロナ禍での在宅輸血への影響

- 間接的影響・・・在宅輸血ニーズの増加
 - 面会制限⇒終末期患者の在宅移行増加
 - 外来の閉鎖
 - 外出制限・感染への恐れ

入退院支援の業務増加⇒在宅移行支援の必要性

【スライド6】

在宅移行支援について、血液在宅ねっとの活動として行っています。少しだけ血液在宅ねっとのご紹介をさせていただきます。血液疾患の患者さんが、地域・我が家で過ごしたいという希望が、できることならば全国どこに住んでいても叶えられるような環境の構築を目指しています。

血液在宅ねっと の目標

血液疾患の患者が、地域/我が家で過ごしたいという希望が叶えられるような環境の構築を目指す。

2015年から活動開始

【スライド7】

今年 2021 年 2 月から NPO 法人となりました。主な活動としては血液患者さんの地域医療に関する相談業務、地域での在宅輸血等についての相談、基幹病院の退院サポート、啓蒙活動などを行っています。詳しい活動につきましてはホームページをご覧ください。



NPO法人 血液在宅ねっと
<https://hemato-homecare.net/>

■ 世話人: (就任順)
 大橋晃太(トータス住診クリニック、東京・船山)
 安達昌子(さくら聖院、静岡・熱海)
 船田亮(くぬぎ山ファミリークリニック、千葉・鎌ヶ谷)
 森塚浩司(赤坂クリニック、兵庫・神戸)
 伊藤達也(西大須伊藤内科・血液内科、愛知・名古屋)
 宮下直洋(HOME CARE CLINIC N-CONCEPT、北海道・札幌)
 西川彰剛(和歌山県立医科大学病院輸血部 次長)
 渡邊 健(ハレノテラスすこやかクリニック 院長)
 瀧本 円(山川七指診療所、神奈川・川崎)
 川崎 英史(在宅医療支援クリニックかすでの風、東京・町田)
 後 祐誠(北里大学病院 血液内科)
 神山 祐太郎(東京慈恵会医科大学病院 血液内科)

■ 顧問: (就任順)
 木崎 昌弘先生(埼玉医科大学総合医療センター血液内科 教授)
 神田 善伸先生(自治医科大学さいたま医療センター血液科 教授)
 川越 正平先生(あおぞら診療所 院長)
 橋本 明子様(NPO血液情報ひろば つばさ理事長)
 伊豆津 宏二先生(国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科長)
 鈴木 隆浩先生(北里大学病院 血液内科 教授)
 新井 文子先生(聖マリアンナ医科大学病院 血液内科 教授)

【スライド8】

在宅移行支援のためのプロジェクトとしていくつか取り組みを行っています。まず血液在宅リソースマップで、これは地域での在宅や外来輸血に対応いただける医療機関を地図上にプロットすることで入退院支援に役立てていただくものです。次は、ATR(血液搬送装置、輸血用ポータブル冷蔵庫)の貸出プロジェクトです。この2つについてこの後、簡単にご説明させていただきます。

在宅移行支援のための進行中プロジェクト

- 血液在宅リソースマップの作成
 - 地域での在宅/外来輸血実施医療機関をプロット
- ATR(輸血用ポータブル冷蔵庫)貸出プロジェクト
 - 輸血専用冷蔵庫として、患者搬送中の温度管理も可能
 - クリニック側のハード面のコストを軽減
- 在宅輸血連携研修会
 - 訪問看護師を中心に、在宅輸血実施のノウハウを研修
 - 全国各地での開催を計画中!

★勇美記念財団により研究助成を頂いています。